

## 深川江戸資料館レファレンス

江東区深川江戸資料館

深川江戸資料館には、来館者から展示室や江戸深川に関するご質問が寄せられ、その内容は素朴なものから、職員が頭を抱えるほどの難解なものまで多岐に渡ります。今号は来館者との問答をテーマに、過去にあった質問を取り上げて紹介していきます。

展示室の掘割にある木製の掲示板には何が書いてあるのですか？



文政十二年 五月 日 奉行

曲事もの也

右可相守此旨、若於相背ハ可為

さる事

一、深川材木積置所ヨリ堀入る川口ニ  
猥ニ舟ヲ繫船路ヲとめへから

揚る者江遣へき事

沈木者式十分之一御定のことく取

あくる材木之内浮木者三十分之

うきしつみ其品ニより、とり

大川筋又者海辺江流出る木者

次第返へき事

ハす商人之材木たりという共断

ひろい取へからず御用木者いふニ及

流出る時大川ヨリ外之内堀而一切

深川御材木并商人之諸材等外江

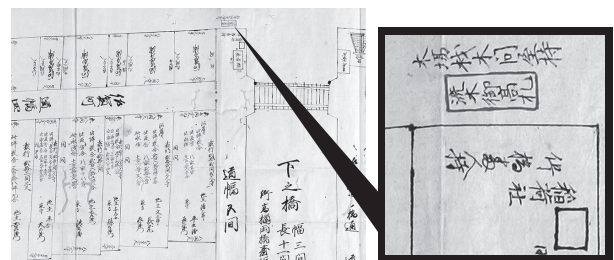
定

掘割にある木製の掲示板は「高札」といいます。法令・禁令を周知するため、庶民でも理解できるように簡潔な文字・文体で書かれており、街道や橋のたもとなどの人目につきやすい場所に掲示されました。

この高札のレプリカは「流木御高札」といい、掘割や大川（隅田川）から流失する材木の取り扱いについて記しています。内容は、幕府や商人が管理する材木が流れて外に出た場合、隅田川以外の堀で拾ってはいけないこと、漂流した材木が浮いていれば価格の1/30、沈んでいれば1/20の料金を、材木を拾い上げた人へ支払うこと、材木置場の河口付近に舟を

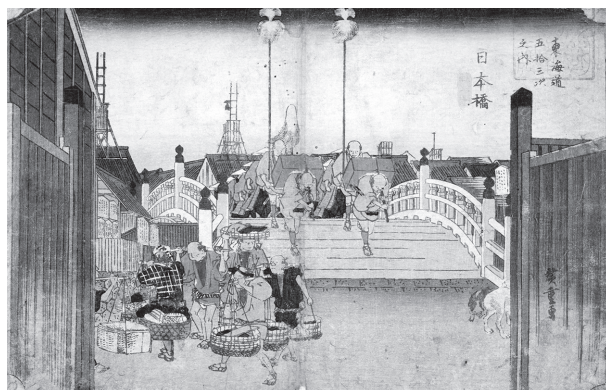
繋ぎとめて水路を塞いではいけないなどの材木に対する注意事項です。

江戸時代、隅田川沿いには河岸蔵が続き、深川の町中には掘割と橋が多くありました。特に深川佐賀町は、江戸の流通が発達した時の中心的地域で、仙台堀・中之堀・油堀・のちの大島川西支川や亀堀といった水運などの利便性の高い掘割が縦横に流れていました。



「深川佐賀町惣絵図（部分）」（東京都立中央図書館蔵）

当館が深川佐賀町の町並みを再現するため参考にした「深川佐賀町惣絵図」にも、下之橋（今の佐賀二丁目辺り）のふもとに「流木御高札」が掲示されていたことが記録に残っています。水運が身近にあった江戸深川の風景を、展示室の高札を通して想像できるのではないのでしょうか。



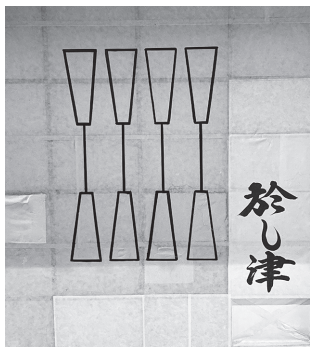
人々が往来する日本橋のたもと（左奥）に高札場があります（「東海道五拾三次 日本橋」歌川広重（国立国会図書館蔵））

## 蕎麦屋台の看板のマークは何ですか？



元禄の頃から蕎麦屋台にみられた看板の「二八」蕎麦の由来は、「小麦粉と蕎麦粉の原材料の配分が2:8」、「蕎麦は一杯16文(2×8=16)」などと諸説あります。その「二八」の文字の下に船の錨いかりが描かれていますが、錨とは船を一定範囲に留めておくための道具です。ここでの錨は「(錨を降ろして) いつもここで営業しています」、「お客様を繋ぎ留めておきます」という意味をもっています。江戸らしい言葉遊びを利かした看板です。

## 於し津の長屋の障子のマークは何ですか？



於し津の長屋の腰高障子

長屋の住人・於し津は、三味線の師匠や手習い塾などで生計を立てています。障子のマークは「四つ並び杵きね」と呼ばれています。杵とは餅をつく道具のことですが、ここでの杵は三味線の家元である「杵屋きね」をいい、三味線や長唄の教室を表した看板的役割がありました。江戸の女性にとって三味線などの音曲は嗜みたしなのひとつで、特に裕福な家の子女の習い事として人気がありました。

ちなみに、長屋の裏木戸にある庇にも「三味線指南 おし津」と看板が掛けられています。展示室の裏木戸の看板は、式亭三馬の滑稽本『浮世床』の挿絵をもとに、住民の表札や商いの看板を再現しています。看板には展示室にある長屋の住人と設定が異なる役職がありますが、当時の江戸庶民の職種を知ることができるといえます。



裏木戸 (右から三番目に於し津の看板)



『浮世床』式亭三馬著 (東京都立中央図書館蔵)

## 展示室の長屋の各部屋の広さは、本当にこれくらいなのですか？

長屋を覗いた来館者のほとんどが部屋の狭さに驚きます。実物大に再現しているからこそ、家族が住むには手狭だと実感できるのではないのでしょうか。

江戸では約七割の人々が長屋住まいでした。武家屋敷や寺社が面積を占めていたため、庶民の一人当たりの生活空間は狭かったといわれています。

長屋の広さを説明する時、「九尺二間くしやくにけん」という言葉を使います。四畳半ほどの狭い部屋という意味ですが、実際の長屋は様々な部屋の広さがあり、決して貧しい暮らしではありませんでした。長屋には押入はなく、大人が二人座りだけで窮屈になりますが、生活スペースを確保するために、布団は隅に重ねて枕屏風で隠したり、衣服や道具を壁に吊るしたりするなど、現代にも通ずる収納方法を駆使して生活していたようです。



三人家族の秀次の長屋

## 今号の参考文献・協力者

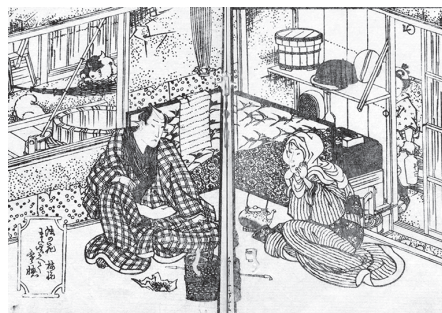
『深川江戸資料館 展示解説書』(江東区深川江戸資料館)

『資料館ノート(1号~100号)』(江東区深川江戸資料館)

『町方書上 七』(江戸東京博物館友の会)

『浮世絵に見る江戸の食卓』(林綾野著・美術出版社)

深川江戸資料館展示解説アドバイザー・米澤繁、久染健夫



長屋の様子(屏風で竈を隠しています)  
『春色英対暖語』為永春水著(国会図書館蔵)